

徬 徨

— 第 六 号 —

昭和26年5月



都立西高等学校山岳部

「徬徨」第六号 目次

表紙カット

西高山岳部を去つて

田中 実

過 去

将来を期待して

笹野 幸夫
高橋 洋文

夏期公式山行計画

(5)

西高山岳部に入部して

宏の知識と忍耐を

中山 護 郎 2

あらゆるものを克服して

戸田 喬 2

「山岳講座」を覆説

関谷 徹 2

死んでもしゝから

福田 宏 二 郎 2

山は努力の象徴だ

香藤 忠 正 3

山こそ僕の心の灯だ

林 武 志 3

親切な上級上

川村 宏 3

SOLITUDE

田中 将 利 3

山行報告

雲取山 報告

田中 実 4

及 省

丹沢主脈縦走

菅野 英 司 5

報告

新編「塔の岳」

竹内 英 次 6

塔の岳「煙ヶ岳」

加藤 鈴 夫 6

煙ヶ岳「井戸沢の頭」

平沢 勇 7

井戸沢の頭「藤野駅」

村田 博 之 7

及 省

長崎 正 躬 7

ゴシップ二題

8

山之隨想

より舌しり山行きを

板沢 純 男 8

山小屋

中井 玲 9

遺辨印象記

頭に浮かぶ青い石

今井 高 9

紀行文

奥穂高岳登山記

山田 和 子 10

仁人山行報告

草津スキ

山口 雄 弘 11

赤倉スキ

佐藤 信 治 11

三頭山糖指尾根

村田 博 之 12

丹沢表尾根

中野 英 司 12

鍋割山

田中 実 12

雲取山

鈴木 輝 夫 12

鋸尾根より茅倉尾根

岩堀 安 三 13

川苔山

色田 英 次 13

鋸尾根

T 田 英 M 13

刈寄市道山

村田 博 之 14

川苔山

田中 実 14

戸倉三山

菅田 英 治 14

大岳山

佐藤 信 治 14

部内あしこ山

15

山麓情報

田中 将 利 16

山麓情報

17

部員名送

田中 実 17

しめくくり

田中 実 17

しめくくり

田中 実 17

しめくくり

田中 実 17

しめくくり

田中 実 17

しめくくり

田中 実 17

しめくくり

田中 実 17

しめくくり

田中 実 17

五十年の歴史

西高山岳部を去つて

過去

0.B 笹野幸夫

短い瞬間の幸福を味ゆんが爲に多くの困難をも敬て意としないのが人生である。いやこれこそ我等のそして山を愛する君の一般心理である。我等は何を欲し何を夢みて山を求めぬか。……山、山、これこそ人生に通ずる唯一の道と我等は確信してゐる。たゞ一人暗い灯の下で、或は幾人かの山を愛する君の集りて我等はいつ盡きるとも知らぬ山の想ひ出に遠い空の彼方を見つめることが往々にしてある。過去に於て我等の歩み来つた道、これを兼しき想ひ出でありそして我等に及酒を身へるよき資料なのである。西高にして山岳部に別れを告げぬばならぬ身となつた私にとって在学当時の想ひ出……山の想ひ出こそ人生航路を飾る兼しき一ページでもあり、又私を西高から去ゆしの難くした一原因でもある。最後にあたり不肖私として心の故郷、西高山岳部麓展の爲に今后とも後立つことがあれば幸ひであり且つ部のよりよき発展を切望して止まないものである。

将来を期待して

0.B 高橋洋文

中学以来六年間通ひ続けた西高とも遂に別れて、愈々新しい大学生活に入る事となつた。この時過ぎし昔を回顧すると、非常に感慨深いものがある。富士登山をやつて失敗した事、初めて秩父の新緑を見てその舞かさに胸の高鳴る思ひだつた事、豊かき陽光に恵まれ天城行、シンと静まり返つた星の瞬きのが簡える様を気がして早川小屋の一夜、總てが兼しかつた山行の憶ひ出ばかり、然しそう自分だけ陶醉してゐるわけには行かぬ。若成后既に五筆を經て我が部が未だ確とした方向を持たず、暗中摸索を続けている事の一半は我々新卒業生の責任と申し候ふに思ひである。私自身敗筆は何もしなかつたので、甚だ心苦しいが、高高山岳

部として我が部はワンヘルソムの行き方を取り、可成多くの君に山を愛する精神を教え且つ実力増進を図つて将来に期するのが第一にます。べき事では有りかと提議して去る次第である。とにかく新幹部に期待し、本年の躍進を祈るものである。

夏期公式山行計画

- 五月 雲取山(前夜流)
- 「期日」五月二日—三日
- 「コース」鴨沢—雲取山—大ダケ
- 林道—白須—水川
- 「係」戸林
- 「費用」三〇〇円
- 六月 水無川本谷(日帰り)
- 「期日」未定
- 「コース」溢沢—大倉—水無川本
- 谷—塔ヶ岳—渡沢
- 「係」未定
- 「費用」三〇〇円
- あくまで美しく明るく、それについて進行の面白さを満喫させてくれる沢のある。
- 七月 乾徳山(二日行程)
- 「期日」未定
- 「コース」塩山—乾徳山—黒金山
- 大ダケ—塩山
- 「係」未定
- 「費用」二〇〇円
- 秩父の本格的な山行を味わうのに
- 絶好のコースで、山脚と巡る植物の变化ある美しさはこの上なく我々の目を魅了させてくれる。
- 八月 秩父主脈散策
- 「期日」未定
- 「コース」Aパーテ—(五日行程)
- 川上—金山(泊)—金峯山—大池小屋(泊)—雁取小屋(泊)—将監小屋(泊)—雁取—鴨沢
- Bパーテ—(四日行程)
- 川上—文字峠—甲武信小屋(泊)—雁取小屋(泊)—将監小屋(泊)—雲取山—鴨沢
- 「係」未定
- 「費用」六〇〇円
- 古今人跡を印さざる荒生林、霧、……その他の秩父の醍醐味を心ゆく迄味わふのにおさゆしりこし又で、五日間という長い間の行程は自己を及ぼす母機を手えてくれるだろう。
- へ以上ほど決定したものであるが更に補う事があるかもしれませんが



西高山岳部に入部して

広い知識と忍耐を

—A 中山 護 郎

僕が小さい時から憧れていたもの一つに、山がある。山は非常に偉大な感じがするし、又山特有な魅力を持つてゐる。そんな所が憧れである一つの理由かも知れない。

しかし中学校には山岳部もなく夏休みに一團位友達と氷川辺りの山に行けなかつた。西高に来て先づ目に止つたのは山岳部の部員募集であつた。それと反逆を誘つて入部したわけだが何しろこの様な部に入るのは始めてなのでちよつと勝手が分らなかつた。

山に憧れる。それは全世界の一番健康な心のゆきではないだろうか。こゝから先達の云う事をよく聞き山に対する知識、理解を深めてこつと科学性のある憧れを山に対して抱きたいと思ふ。それと共にあらゆる面に対する注意及びしん擧強さをやしなりたいと思ふ。どうぞよろしくお願ひします。

あらゆるものを克服して

—A 戸田 清

入学以来、およそ一週間中学時代の非活動的な自分を見返して何かの部に入らうと思つてゐた。そのほが先が向けられたいのがこの山岳部である。あまり目立つ争はなく地味な山岳部でいて深みのあるものをやりたいと思つてゐたから別に山岳部に対しての深い知識や経験があるわけではない。だが入つてみていろいろ考えてみるに自分としてはうまい争をしたと思つてゐる。青緑の連なる山々の風情、山を征服する迄の忍耐とそれに合

せての長び——こゝの交錯する感情を思い浮べると山岳部に対する希望期待がぶつと湧き上つて来る。もつとも苦しい争もあろうが、その位の争がなくては判教にならなう。又その争を克服して行く事に才一の意義があるのだから。幸ひにして山岳部に入つたからには大きな抱負を以つてより向上したものにへとする事に至らなうが力を盡したと思つてゐる。

「山岳講座」愛読

—B 関 谷 徹

僕が最初に西高の山岳部があると、争を知つたのは合格発表表の十七日、祝入等と書いた紙を見た時だつた。なぜか知りぬが山は好きで、スキーは今年も二月二十五日アチーブが終つてから暫平に行つたが、山に行つた事は殆どなく、田舎にばかりいた時小学校で新拾い、土運び、せんまいわり取りに山奥と引っぱりまわされ位で、山の事は全然知らずまいが、事情の許す限り山に行きたいと思ふ。僕は体も小さく力も無いので、日本アルプス等に行くのは無理かも知れないが行きたい。又富士山には今年の夏に行きたい。山に行くには気象の事や登山の常識や享樂などもある程々満足出来るものでなくてはならぬので図書館にある「山岳講座」というものをかりてきて読んでゐる。

死んでもよい!!

—A 福田 宏二 郎

山ほどよいものはない。僕は小学校のころから山が好きだつた。そして中学一年の時に待望がなつて北アルプスの麓に行つた。山頂に立つて下をみると一面の雲海であつた。何だかこめくまなつて来るようにも感じた。又一種の神秘的な感を充分に受けた。しかし僕はアルプスだけにある特有の氣に包まれた。こゝ以来僕は山が好きになつた。中学にも山岳部を作らうと思つたが野球部の委員だつたので出来なかつた。

高校に入つたら必ず山岳部に入らうと楽しみにしてゐたが、母からの

山行報告

雲取山

期日、一月十一、十二日

参加、中野(3)、鈴木(3)、田中英

コースタイム

【カニ日】立川(六、四)ー氷川(八、五、八、三〇)ーカモ沢(九、五、五、一、〇、〇)ー農家(二〇、四、二、二、〇)ー堂所(二二、五、食事(二二、五)ー大ブナ

(三、二、〇、三、二、五)ー小雲の肩(四、五、五、五、〇)ー小屋(五、五、五、五)

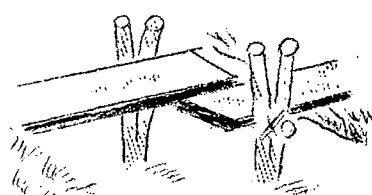
【カニ日】小屋(八、二、〇)ー雲取山頂(八、四、五、九、〇)ー大ブナ(九、〇、五、一、〇、三、〇)ー屋根上(二二、五)ー農家(二二、〇、二、二、〇)ーカモ沢(三三、〇)ー川野(三三、五、

一三、三、〇)ー氷川(四三、〇、四三、五)ー五川(五、四、五)

裝備、アイゼン、ヤッケ、着換、米五合、懐中電灯、手袋(以上各二)、費用、氷川ー西萩往復百六十円、バス代、氷川ー鴨沢五十五円、川野ー氷川四十五円、高泊料、白田、合計三百六十円

雲山の裝備に四ツ目のアイゼンのみ加えていり、冬山が我々に「利」なる結果を与え、事は単に今年のみであらう。来る年の冬山を相手とするならば、いらい事に勝るともおとらぬ計画以上の計画を準備以上の準備をとして、フアイト以上のフアイトを組み立ててもらいたい。

【カニ日】前日の東京都内は雨後雪であつたが、氷川に降りると六七寸の銀世界だつた。「昨日の最終丹波行は出遅し、かゆかないから今朝も危い」と云う人々の声は我々を落胆ならしめた。が、会社側の好意により約二〇分遅れてタイマがクサリかゆからなほ探るタイマが廻り出した。白一色の山間にあつて、小河内タムにゆく人々に思わぬすえをもらはれ、まう。我々の自動車は如女雪に輪立を残す。後景は美しいと云うより頼



母し。鴨沢九時五十分中野が車中こらえていたはき気を公開す。田中又彼としてはリビにも達しない顔色だ。例の糞尿にて茶、イモなど御馳走になりかぬで用意してあつた光(タバコ)を差出して飛び出す。トソブに中野が歩き、田中、鈴木とこ肌が続く。我々に抜くつ故か、行商人らしい男と小袖のはず肌(点)行だ。天候は凡てそまひが未だ降り足りなり様を頼む雪を解かす温度すらまひ。小袖川を見送り、堂所山の神で十二時五十分食とし、バス以未中野、田中は空腹を訴えまひ。そろそろ積雪量は晴しひきまてつこむ。しげく如女雪と云んでいた我々も「昨日大洞川で秩父の糞尿に腹を積取りされたよ」という糞尿帰りのリョウ師の踏み跡にヒツナを上げる。片倉谷を巻く一しきりの上り、は巖壁が径にかぶつて危い。期待した水場もソララのみだ。拵、白傘、ナギは昨夜の吹雪を物語つていり。やがてカラ松を左に等戸を右に出せば、桐坂に飛び出す。「三時迄に桐坂に着かなければ引返せ」と云う言は、天候とリョウ師のふみ跡を信用して、紐、ヒツナを上げる。積雪はひきさを上下する位だが、風の強い、この雲根は吹だめと吹き取られた所の差が非常に大きい。しかしあくまでリョウ師のふみ跡は我々を有利まわしめた。凡はなく空はどす黒い中にも多摩大菩薩方面がどんより見える。低温のたの樹氷は透ちた所少なく我々の冬山にこ肌ほど美しいものはなかつた。先頭田中以下中野、鈴木と続く、動物の足跡などを研究していつた。彷徨も小雲の肩辺りにて急救を請うる。「頂上へ二十分、小屋(三の分)」と云う奥多摩山岳会の道標の所にて丁寧なラッセルの跡を覓附ける。当然頂上はさけるべき。高田氏の好意だつた。時計は五時を越つたばかりだったが、十五米先がみえまひ、とらッセルした跡も失いがちだ(ラッセルしてまひ所もある)決して我々は安定さ肌を存在ではまかつた。ゆきとさけていた懐中電灯を取り出し、中野をラストにした。道標の三の分はずで、四の分を越つていり。九対二位の割合で急す足が時間を取ることは明らかだつた。径が大きく左に越る時我々は犬の声を耳にした。そこから五分、懐中電灯の先にはあの小屋が淋しく写つていた。時六時前とは云い、真暗な山中に我々を生からしめたものは全てあ

のふみ跡とラッセルのお蔭によるものであつた。妻ま肌は天候にあつて
なほ起る冬山のおそろしさを少人数でありすぎた事と共につくづく及有
の念をいだきつゝ、蘆原に赤についた。

★オ二日 大時起床(零下大度)中野が時計がなる聲に目をさましたと
云つのが氣になる。「鴨沢へ下りなさい、ここは八時に起きなさい」全
てがずばりである。雲取小屋も冬季向は水がストロップし水凍から氷をか
いてくる。富田氏に頼が下る。親切なまじり肉桂煮をかこんだ笑顔の
五人、印象は余りにも深い。「高等学校の間は冬山まんかに来るもので
はまいダレンデスキーをみっちりやりなさい」「ではお大事に」と云
て送り出した。がマ仙氏の言葉は私の一生の教訓であつた。頂上の柵跡の
急登は相当氷つてけるが雪が少いのは以外を收穫だつた。「今日は風が
出ます」と云つたがマ仙氏の言は早くも雪中レバサバサと雪が落ちる。
三十五分のアルバイト、握手、三六の慶展望、快晴、山、美、自然、全
ての計画の末期をさへ感じさせる。興秩女縦走路は堪く光り我々を招い
てける様だ。強い日光と強い風に樹氷すらすらバサッ落ちて目にキラッ
と光る、自然にしかなく美、山にしかなく美、何ものにも得られな
い美の連続である。力チカチになつた表面も我々にはたえられず五六歩
歩いて三三十歩腰迄迄とす。しかしこれに準する美嶺の連続なのである。「す
げえ」と云う声は冬にしか聞けない山男の声だつた。各山の荷物は四
角洋袋である。以袋袋不を枕においた。樹皮丘の下りは登山の場合石
が転がったりまき径が多いが冬山は一米近の雪のため体力こそ消耗する
が時間的には楽に下れる。先日の樹氷は全くないが銀世界に立つ唐松が
白衆の対称で美しい樹皮からも昨日のコースであるが、我々のふみ跡が
生々しく努力のふみ跡として感がい深い。セツ石尾根を越し虎倉谷の音
を耳にすれば、最早一息だ。堂所辺りより木のしづく径に石が
出たり強い日光に顔を赤した径が現れる。昨日決つていた子決蓮のソリは蒸
れにも蓋捨てられぬ。ぐちゃぐちゃした径を急ぎ足で例の湯煮に立寄り
既りろ端で尽食とこり二時二の分鴨沢に突つた。バスの便宜を計り川野
迄歩き約四十分の後川野発三時三十分氷川行の人となる。ふと見ると車

じようは行く時の人と同じだ。私はこう思った。「彼女は我々の無事で
ある事を待つていたのだ」「そして我々の山行は大成功だったのだ」
(3D 田中 実)

雲取例△△後日記

三A 中野英司

山岳部の尸支を考えてみると、昨年の冬そ氷以前に冬の雲取丹沢主
など考える事出来なかつた。この例会、遂に二月の丹沢主脈の例会と
考えると本当にうれしい。この不完全な記録が後の大発展の基にまるこ
とを望んで感想を書く。

一、新雪で腰あたりまでもぐつたのに輪カンの準備がまかつた。カマ仙
氏の言により用意しなかつたのだが、新雪の區分でなければ一月の初
まり輪カンは殆んどいらまひのではありませんか。四つ齒のアイゼン
は絶対に必要、カマ仙も四つ齒アイゼンの必要を力説していらした。

二、天候が荒れまくて幸したが、ウイパーの準備が不足していた。天
氣がくすむらうらうらう、ひや汗が出る。

この二美が目につく所で、三人氣を合して冥に祭らされた。今年の冬は
雲取例としてデントを振る事が出来る近がなばりたものだ。

加一 一行計画 式公期夏	
五月 大岳山	「期日」五月十三日(「係」林IF)
	「コース」立川→御嶽→竜本
	→御岳山→大岳山→馬頭刈
	尾根→鶴巻岩→馬頭刈山→
	高明山→軍道→十里木→五
	日市
	「費用」百四十円
	リーダー以下七名全てが一年
	生かするパーティで各自回費
	「係」中野
	「費用」千七百円
	高瀬川を登るはずであるが、
	詳しい事は追って通知
	目以上を皆願わせ、快晴に恵
	ま肌を十三日(日)難大に行ゆ
	肌は、一年諸君の活躍に西高
	山岳部の不在は打ちまうにし
	て済えなかつたと云つてよからう。
	八月 比アルプス

丹沢主脈縦走

期日・三月三、四日

パーティ・CL長崎、SL村田、越田中(実)、平沢(専)、竹内、鴻池(以上二年)

加藤(二年)

コースタイム

第一日・新宿(三〇〇)滝沢(二二〇)大倉(三三〇)見晴台(

三三五)四〇〇)一本松(〇二〇)小翠平(二〇)花立(二二〇)三三三)塔の岳

(三〇〇)枕塚(三二〇)

第二日・起床(六三〇)塔の沢発(七四〇)龍ヶ馬場(八二〇)丹沢(八三五)八五五)

釣瓶落し(九〇〇)不動峯(九四五)鬼ヶ岩(一〇〇〇)蛭ヶ岳(二

〇〇)三三〇)地蔵平(三三〇)井ノ沢(四三五)一五〇)泉道の上(天竺

一七〇)長又のつり橋(七四〇)菅井一小舟一大入和(馬本(二〇〇)杉

一大刀一藤野(三、三〇二)三三)

費用・新宿一滝沢百円、藤野一新宿七十円、寺佛小屋(前住三時間)

七十円(但し一泊百三十円) 合計二百四十円

装備、アイゼン、マッケ、米五合(各自)、ワカン

(笹田英治)

新宿一塔の岳

東京から富士山を眺めると何時も其の腰の辺りを長く取巻く真黒な丹
沢山塊、特に蛭ヶ岳が目につく、その山塊の雄り印象、魅力に引かれて
我々八名は南から北に抜ける尾根縦走にとりかかった。

二月三日 土曜

二十時十分新宿と出発電車にゆられる事一時間半余、小田急武蔵野線に到
着、駅前茶店にて身仕度を揃え十時十分出発、ひっそりして小ぢな駅
前の町を通り抜け階切を過ぎると一面に水田、目の前に真黒な大寺
女山々がぐっと展開され塔ヶ岳より大倉に直下する草履根が導先に見え
る。天気は上々、皆体のコンディションも快調、一團となって足を早める。

塔の岳、赤戸を通過、大倉に着く。これよりいよいよ山道に入るのである。

道は細くまり、屋敷を通り抜ける不明瞭であったが犬にほえられまが
らも登道をつまき発見、東南した株草地の平を三三三米登ると尾根に出
る。これよりいよいよ馬鹿尾根登りだ、草履根も風景は良いらしいが

しむらくは奥暗で何も見えまい。この町の光が空の星と対峙するかの様
に輝き放打っている。少々の急傾斜を真高百米腹で一本松に達する。少

休、出発向もなく丸い野山の東側を巻く、この辺りでトレイニングの少
かった鴻池吐息を催したが大したことなく回復しそう、やがて鞍部に出
る、さつきまで寒かった尻も今では快き尻と愛り耳をかすめて行く、暫

く急に登り姿、上下して花立(馬の背)に出、二川をすぎ小鞍部に出る

と愈々懐の登りだ。懐中電灯は二川川でついたり消えたりしている。

深い箱道を五六十米登ると草地に出る、二川が塔ヶ岳だ、時に、時、分

一面にさえぎるものなく目前の相模志は神を流した如く黒く光っている。

雲一つない絶好の天候、月こそないが幾千万とも知らぬ星が高く、輝

やわっている。我々一同程良き寒さを感じ明日の希望を胸にいだき、小

室に入った。

(三年、竹内 章)

塔の岳一蛭ヶ岳

二月四日(日) 英夙快晴

くたくたの身体でたどりついた我々はすぐに管理入を脱して土間に寝

る、火を起してしらつたが束りので重なり合って暖気が二時間ほどして

起きてしまった。寒戦針は既に零下十三度を指している、丹沢小塊の特

徴である。平たんな山腹に出るとはの晴りうすもやの中に東には長々と

東京湾が見え房総半島三浦半島が東京湾をはさんで長く突き出てゐる。江の島が一つぽつんと浮び相模川が細く流す川に目と賑す川は岸上から見たに御神火燃ゆる大島を望み小田原城下を眼下に見下し面には稲根赤石山脈が裏々と浮び出てゐる。雪の残つてゐる急斜面の道を降り龍ヶ馬場のみだらから道を途中に冬の朝日を一ぱいあびながら登る。ふりかえる相模湾が朝日をうけて銀色に光り伊豆半島から三浦半島に至る海岸線がはつきりと見える。平坦な丹沢の原上で一休みしを後に丹沢の深い谷を見下し雪上に突々とした足跡まごがついてゐる路をたどり鬼岩の意まが川場を下り怪の長い斜面をのぼり霞の頂上についた。(二日加藤鈴夫)

蛭が岳―井戸沢の頭

昼食を済ませると、げんきなもので、皆勢よく立上ると蛭を後に駆け出した。調子よく下るうちに方角ぼんやりと、リ怪を失ひ、あゆやと思ひつたが遂に後方に道を得た。沢中に懸世の中に入れば日影には雪があつてアイゼンの有難さをよく知らせてくれた。一時に地蔵平についた。杖を固く握り三人に念ひ話をした。その発音の分り難い事、やうと怪を聞き、御疾御取りに言葉と振つたりして三十分程休んで蛭沢の登りに向つた。蛭沢は高察様の力の力マツトで皆伏調にピツチを上げた。水の欠乏を感じる頃井戸沢についた。二時五分過ぎである。シリマードの妙技で沢へ降り、水を汲もうとしたが、水場は氷結してゐてわずかに氷を砕いて水筒一ぱい得ただけであつた。(正平沢 勇)

井戸沢―藤野駅

尊佛小屋出発が遅かつた事と途中で時回を取りすぎた事等が原因して道志川に沿う景道におりた時は予定を大分遅れさせた。突々とした景津橋の響を後に径は本大田んぼを左右上下に直角にまがって先を争う釣橋で対岸(長又)に渡つてから親切そうな若い人に藤野迄の道を聞く。

敬てある 平たん山山腹に出るとほの暖いうすもとの中に凍りは長く

四時同位か、この事に一同はうんざりしたが元氣を出して歩き出した。この暖日は既に沈み、辺りは奥暗闇、道が大きく左に廻る噴から下段に降り土橋のかつた沢に到着。沢沿りの道をのぼりつめる。沢の中は更に暗く全く懐中電灯のみが頼りであつた。二十分位で沢を上りつめ先程教えてもらった鞍部についた。この道は下り坂になつて沢の猿頭を大きくくまなく林道に渡る。流一や川たパーテイに追る暇不足、疲勞とカバーステはげましの声は寂寥まつた森林にも深く響き、整つた歩調と共に道志の山々をこぞます。小舟の部族からは自動車道路とさつたが、更に歩きにくい。凹凸した道を辿り大久和、馬本をすぎ道が秋山川を渡る磯対岸にやつと藤野の町の灯が見え出した。大かど相模湖を渡ればもう歌までは一巻足である。さすがに腹水をと見えて来たにつくこ中にはすくねむり出したものもいた。藤野第一の時二八分。カララとした終列車は話す程すらく西高山岳部の大きな(びきと共に深夜の山間を送つて)つた。(36村田勝之)

丹沢主脈縦走反省

CL 長崎正 躬

(一)の山行に於て全員が無事に帰れたのは幸一に丹沢山腹にては珍らしい程の快晴に恵まれた事です。大勢になると有勝ちな感情の対立もなく、楽しく歩行したのは本当により事でした。しかしその反面に足水もいへず、歩も否定出来ません。休み時間を始めから定めたまかつたのは僕の失策でしたが、その水にしても休みの時間が予定よりいっつも長くより勝つてしまいました。次には「ばてる」事についてですが、これはその日の自分の体の状態に依つて、その状態の軽重はともかくおこなふのです。しかし次の準備守つて下さり。即ち「最悪の事態、即ち荷物なしでも歩行が不能とする前に、友人に伝える」事です。少しの間無理して後に大変な手数をかけるよりも、早く知らせる事です。へきなす、膝に下級生が上級生と共に行く場合には遠慮して黙つてゐるのはよくない事です。次に皆んまが道志川に降りた時のように時雨が少し遅れ戻りして皆んまが寂小まける時は大

して氣に留めないので、「捨て鉢を言承」などは発しずいで下さい。これは上級生に特に望みます。次に歸郷と願望へ取った事は問題に有りませんが、この場合僕は時間的に云つてこの方が良策と思ひます。終りに裝備は完全を期して下さい。特に冬山にはアイゼンを持って来て下さい。本當にこの山行は楽しいものだつたと云ふ事を添えておきます。

ゴジツプ 一題

丹沢の巻一

車中、道中と肉わず人(男女共に)と観察する能力の鋭いS君、錫割山を下つて早、宇津我村に入り靴の紐をしのぐとしたら辺りの子供に囲まれる。「うゆ、すげえな進駐軍の靴だ」「進駐軍の水筒みぢりだ」と相当進駐軍が珍らしりとみえる。そこで我々も一茶

「オウガル」「ボ、ウ、メイ、ク、ツ、デ、スカ」「キ、メラメル、ア、ゼ、マ、シ、ョ、ウ、カ」「サンキュー、ベリマンテ」「ア、ソ、バ、イ」「マ、タ、キ、マ、ス、ネ」とごまかした返はよかつたが、少々登りがつた頃、はるか先方に見える女性に「オウビリ、ティ、ル、お、は、あ、さん……ソ、ー」
今向、ものはよく観察し言葉に傾しむさうです。

雲取の巻一

前号で紹介し読者を爆笑させたあの我が又もゴジツプの程とまつてしまった。古人曰く二夜ある事は三夜ある。正月気分未だ去らぬ土日にS、T、お、パ、ー、ティは雲取オ、一、歩を例の雲取へ訪れた。(念のため米りて買つて来たタバコとあけたいからです) 当夜時さらぬ雑音は止まらず、見ると遠先に血の色も生々しい肉山、三山、三山、三山、一方、足元とみると純白な積雪に血コロンが一つ、二つ、三つ、四つと移せば骨内飛肉が我々が、我々が、この肉を食へるのか、この肉が我々の肉なのか、我々の肉、この肉が、この肉なのか、一瞬、顔を見合せたその時、奥の方から人さうぬ、ま、らぬ脈ならぬ馬なうぬ叫び「メ、メ、メ、メ、……」
苦笑しは止まず、新しいうちは牛肉よりせんせんおいらですよ」とは。
O.O氏のあだ名が今更傑作である事を感じてまらぬ。(M.T.)



よソ苦い山行きさ

板沢純男

胸と痛の青白い顔をしたSは汚りリキフを取り出し妙に笑るピンケルと手にニタクと無気味に笑い時々白い歯をみせてちらりとこちらを覓、又無言のうち明日の山行きの支度をしています。

今山岳部の方から全くの門外漢の私が雑文を讀ま肌肌に向つていと妙にSの笑があの高夜の簡潔一室の自習室が浮んで来ます。

に自らの生命を絶つたのではなかつたか。山を登り山に生きた。私は山を知りません。だが山を見山の霧と聞くのは大好きです。浮世の憂を忘れ大自然に抱かれるのは何とも云えなかり及びですぬ。素人の私がこんなことを申してよいかどうか判りませんが何か一般に最近の登山は登山的になつてゐるのではなかりでしょうか。楽しみを承めるレクリエーション的さの心結構ですが、より苦しい山行をして腹をこり、其処に新しい及びがあるでしょうか。何も高い険しい山のみを、承めるのはありませんが。又反面部員以外の人々に山の美しさ、清らかさを報せて下さい。山に登りたい人は登山しなさい。周到なる準備、旺盛なるファイト、草の穂にぬころび又歩く人々には決して悪人はいませんね、Sは今工學部の研究室にいます。が復も悪く収めました。

とかく利己的に又打算的にまり勝ちなこの時代、この学校に山を登し山に生き抜く若い人々の集りのあることは幸いです。

つまりその理窟を抜きにして山男達は気気に歩いて下さい。
(氏は本校社会科教師)



中井 玲

(9)

峰ははげしく山小屋は懐しく響くと云うまれば主観の問題に退守す考
察の余地はまい。川川ども一般にこの事は是認すべしと見てよりと
思ひ、筆なる言葉の響きが何故この様に違ふのであろうか。峰々深は人
間から独立して考える事が出来る。そ川に對して山小屋は人が吾々自身
のために建てた事によつて人間から切り離して考える事は出来ない。て
こに自ら両者の語の響が異つてくる事もうまざると思ふ。山小屋が言
葉として岳人に親しまれてゐるが、山に入る者には其の経路の険が響す
に從つて山小屋への親しさと言ふものが響すのである。自然の風景が私
達の心に刻む印象は大きいとはいへ人々の感情が刻み込む場合は少く悲
局心の故郷としての親しさ感情は人々の素朴な生活感情を道して作り出
る事が多い。従つて素朴な生活感情を通して作り出る事が多い。従つて
それは山でも人のいる所山小屋山宿からの印象に支配される。無理に頼
んで泊めてもらつて御礼の金を出しても受け取らぬ山の人。山と行
きつりになつて小屋に泊めて御馳走してくれる山の人。それらの人達は
彼方の山此方の谷に駆住する渡り鳥の様な人達である。殆んど一面識も
まい人にあたりかた人情と親しみを示してくれる二川らの人に接した岳
人は少くまいと思ふ。こゝに人間への親しさを示す山乃至山小屋
と印象が結びついてくるのは誰も理解が出来よう。私自身のまじり狂
からして本當に人の真情に触れたいと深く親愛を希むる浮べるのは大
抵こつした山の住居の生活を通じてである。私達は山を歩く感情即ち山
の中に投げ出す川に時に生ずる不安が人間の存在を示す山小屋によつて
着しく弱めらる事も多くの験から理解出来る。例えば行きつりの
旅の人が山でずく親しくなるのは冷然と自然に對する人間感情の無意識
ま共同防禦から起るものと思ふが、一人山にある時は他の人と悲しい人の
存在を示すものに含うと心は安堵を覚えるのが常である。不安な小路を

行く時は一本の指導線は勿論跡或は煙草の吸殻にさえ人の世のつまが
りを知り心の存うかさを感ずるそして深い山の中に会う小屋に杖を
かけて度々。何時同じ彷徨して日暮やつと発見した山小屋がど川程有難く
又親しみを感ずるものであるかは山を歩いた者にはよく判ると思ふ。私
達は唯功利的な一面のみを追求せず心の底に触れるものを求める故に山
小屋でも設備規模の完全さには何ら親しみを感じず豪壯よりも素朴を愛
する様になる。かくて私達は山小屋の概念が持つ建築物の風貌をホデル
宿屋何々荘からくる概念よりも親しいものとしてそれ川らが他の山の猪
物——峰溪谷峠等よりも身近いものとして行くと思はれ川に親愛の観
念が生じて行くのが判る。恐ろ味ゆつた山小屋乃至山宿の人達の人情の
深さゆり心に忘れ得ず、思ひ出は懐かしい中国山脈に走る。

(氏は平放体育教官)

遭難印象記

頭に浮かぶ青い石

今井 言

何れ又遭難當時の事を詳しく発表する機会もあろうし、又しなれば
ならぬ事でもあるが、一頃よく人に、落つる瞬間どんな気持ちか
と問がれてその度毎にその返答に困つた事を思ひ出す。一口では割り切
れまいよな、気がしたり又余りにも簡単に表現出来るよう
な気がするのだからである。あの時は極度の疲労を押しかくし
つつ日景に至る荒れ果てた新道をあえぎまがら進んで、日景迄二
里もまいと思つ頃少しがれたカーブにさしかかつた前、重心を失つた
僕の体は軽く空に浮び「しまった」と思つた次の瞬間眼前に丸い平石の
青みがかった石があつたという間に追つたと云うまでしか記憶にない。こ
の「しまった」と思つた時には恐ろよりもむしろ全てが終りにまると

と云う一種のあきうのに似て平和な気持ちが残つたのである。このよりの感情は生死の最後の瞬間にあるすべての人間にむろくと湧き起るに違(い)ない。それからは全く何の苦痛もなく(人間が余りひどい衝動に出合(う)と肉体的な苦痛を感ずる前に意識を失うというが)気を失つてしまつた。僕は谷底迄下しなかりで中途の丸太がなにかに引っかかったのであるが、人の話によると落下行突然両手をあげて立ち上り救歩谷底に向つて歩き出した時に上からさすべり降りた二人の山岳部員に抱き止められだ(う)らした。そのまゝにしておいた刀つきで再び深く、谷底へ向つて落ちてたろうと上りた連中は気があきまかつたらしい。僕はこの事については何も知らないのでから倒れると同時に交脚的に起き上つたに違(い)ない。本能というものは各々の心に認識されるものであるならばこう云(う)う動作は本能的とも云えな(ら)ない。まことに微妙な動作である。遂に僕は一週間知人と意識と恢復しなかつた。そして気がついたらのは勿論病院のベ(ッ)トでまず顔に浮んだのは青みがかつた例の平たい石と云えるような木の葉の緑であつた。そしてその時よりたえ難い苦痛に日夜悩まされるようになった。―又曲りなりにも新しい生活への道をたどるようになったのである。

1958山行バスター

(カッコ内はスキ)

元	回	日	目的地	乗客	人数	備考
2A	1	18(3)	山口	雄弘	18	(10)
2E	2	18	田中	将判	9	
2D	3	17	村松	博之	7	
2B	4	16	森沢	拓志	8	
2E	5	15(1)	田中	実	8	(1)
2D	6	15	長崎	正昭	7	
3A	7	14	神島	一郎	8	
2E	8	13	鈴木	輝夫	8	
2G	9	11	竹田	章	10	
2E	10	10	中野	英司	6	
2A	11	10	世田	英治	4	

紀行文

奥穂高岳登山記



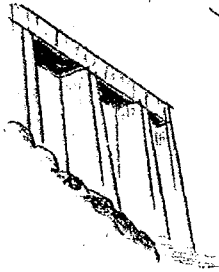
ニ A 山田和子

昭和二十二年奥期休暇を利用して父と明大ワシターフオーゲル部リ(グ)入沢さんとにつれられて、奥穂高岳に登った。奥穂高は日本でも三の高峰、北アルプスの最高峰であるばかりでなく、その雄大な姿は真に印象的だ。今もはつきりと私の記憶に残つてゐる。

新島から松本へ、松本で電車で東横へ、島々からトラツクで上高地へ行つたが(当時は終戦直後のためバスもなかつた)山へ杖水(を)伐りに行くトラツクで、そのカタカタすること、三十種位飛び上る位(に)つた。ずっと梓川の溪谷美を眼下に眺めることが出来たが、然し沢々(の)梓川の水を利用した発電所があるの(で)この雄大な溪谷美が邪魔(さ)り(て)いる大へん惜しい事だ。自動車が大正池畔に出ると、池にはこれ(から)登(る)うとする麓高の雄々しい姿が映り、池中に立つ白樺の枝木や、奥岳の煙を窺ると、あ、上高地へ来たなあ」と云う感じになる。(昨年捨ヶ岳登山の際にも来たので)

カッコーやウグイス等の小鳥の声を聞きながら、白樺や化粧柳の森林を通つて、河童橋を渡ると小沢平に出る。小沢平には沢山のキヤンプが見え、梓川の激流に沿つて進む。この辺はもう大分涼しい。徳沢放(場)へ出ると、だんく梓川からも趣くまり、林も針葉樹林帯となつて(く)る。出合をすぎると捨と穂高の合流道に出る。そこを左に橋を渡つて横(尾)谷へ入る。森林帯の道を行くと石側に横尾小屋がある。この辺の道は落葉がたまり積んで、それが水分を含んで、じゅうたんの(上)を歩く様(で)大(変)な気持ちよ(い)。道は左岸に移つて、屏風岩の横尾本谷との出合(から)廻(る)沢谷に入る。そ(ろ)ろく音溪が見られる様になる。それを回ると、春木帯

の面に向つて、池ノ平に出る。こゝにはもう一年中雪があるそう。雪のどけた冷い清水が流れ、あちこちにキヤンプが見られる。同りは比叡高岳、洞沢岳、奥穂高岳、北尾根、屏風岩等に依つて、大キ奇窟地にまつてゐる。こゝは大空に於ける氷河作用を思ふことが出来る。その晩は、こゝの洞沢小屋で宿泊した。九時噴霧についたが、尽向の疲れでぐすり眠り、朝は父に起された。冷い水で顔を洗つた。あまり冷いので霜凍ができそう。朝食を食へてアイゼンをつけたリセーターを肩たりしてすつかり身仕度とし、比叡高岳の雪渓を登り始めた。未だ誰も踏んでない雪を踏むのはうしろしい。雪ばかり見つめてゐると、目がくらみそう。相当なアルバイトの後、長い雪渓を登り切ると北穂高岳の頂上である。嬉しいことにガスのため眺望がさえきられた。こゝから洞沢岳を経て、奥穂高は、岩場の尾根後走である。ガスが深く全く雪上のプロムナードである。時々這い松の間から雷鳴が喚と出してはおびえを採にかくれりする姿を見た。やがて、奥穂高岳と洞沢岳との鞍部にある穂高小屋に着いた。そこで暖かりうどんを食べて、元氣をつけて、目指す奥穂高の頂上へ出発した。穂高小屋から南へ向うとすぐそこに急な岩場があり途中に梯子が重直にかゝつてゐる。もうこゝを見ても、こんな所ばかりではとうてい私の爪を初心者にはだめだからどうしようかと迷つたが、せつかくこゝまで来たのだかと思つて、恐るく登つてみた。するとそこからはもう山腹も本くなり約三、四十分、奥穂高の頂上へ着いた。こゝでもかすのたの眺望をさえきられたが、頂上の神聖さゆゑ、我固亦三の高峰へ登つたのだと思つてうれしくてたまらなかつた。(昭和二十六年五月九日四年前の思い出をとりて記す)



個人山行報告

草津スキー

期 日 十二月二十七日と三十一日
 メンバー 山口(功)他一名
 コース 上野一堅井沢 片敷電鉄 草津一白根山一草津一堅井沢
 費用 約千七百円(旅費は全額約一泊三百五十円)
 参 考 宿スキー(一泊百円) リフト(一時間二十四円)
 初心者から熟達者に至るまで親しまれてゐる草津は三百五十米に達する大リフトと共に、日本人は勿論多くの外国人の憧れのスキー場である。積雪約百三十センチ、年水のたのであろうかさほどのスキー客はまかつたが四日間のうち三日間は降らぬ日も帰らん日に右足とゆんざし、大賑はびつ二客の晴束だった。数多いスキーツアーコースにあって白根山往復は最も優れ美し。

赤倉スキー場

期 日 一月六日、八日
 パーティ 三好先生、笹田、笹野、佐藤、熊笹、御堂、吉野以上三年
 本向、小山、寺井、以上二年
 コース 上野(一時間) 信濃線田口(三時間) 赤倉スキー場
 費用 一泊四百円、スキー着代一日百円、汽車賃三百五十円位(八等
 割引用)、その他、合計約二千五百円位
 装備 ヲツゲ、着換え、スキー、スキー靴、その他

赤谷平場は信越線田口駅より約四料、好高山の山ろくぐり四つのゲレンデがあり初心者から上手な人まですべれる雪質は粉雪ですべるのにとても良い。リフトに乗り十五分登り三四分ですべって来る。なんともいえなげに気持ち、諸君、ひまのある時はおおりにスキーを楽しまたまえ。スキーをしてから温泉に入って一日をくらすのも又楽しいものである。

三頭山糠指尾根

(佐 曠)

期 日 一月十三日(前夜祭)
参加者 山田中(将)、森沢、長崎、村田
コース

(オ一日)(曇) 氷川(三三〇-三三〇)ー噴(四三〇-四五〇)ー川野(オ二日)(晴) 川野(三三〇)ー山の神(四三〇)ー糠指の鞍部(三三〇)ー三頭山小屋跡(二四五)ー三頭山西峰(二四〇)ー日橋(四五〇)ー河内(五三〇)ー氷川(二五五)ー氷川

装 備 アイゼン、マツケ
資 用 西杖、氷川百大の円、噴、川野四の円、河内、氷川四の円
合計二百四の円

三頭山の大眺望に満足して数馬峠迄急坂を新雪けてつて馳せ下る。積雪ニ〇〇三〇の程程度。路が十字形にクロスして谷底の様な感じの峠だ。ここからは眼前に御前の滝谷を眺めつつ、数回上下をくり返すことだが、風張峠につく。途中で時間を喰ったのでこの峠から下山することに決定。日橋の部落についた時はもう雪の表面が凍っていろ。

丹沢表尾根

期 日 一九五一、二、四、伏晴微風
参加者 中野、鈴木
コースタイム

秦野(八〇五)ーシノゲ(九二五)ー(途中食事)マビツ峠(二四〇-二二〇)ー三の塔(二五五)食事(二二〇)ー塔ヶ岳(四〇五)食事(五〇〇)ー大倉(七三〇)ー澁沢(八三三〇)
三の塔と尾根の間アイゼンがきかなくなり丘からちかちかに氷結

鍋割山

期 日 三月十四ー十五日
参加者 田中実(30)、佐藤(30)、島田(30)
コース

「オ一日」新宿ー澁沢ー大倉ト一本松ー花立ー塔の岳(華佛小屋)
「オ二日」塔の岳ー馬の背ー大丸ー小丸ー鍋割山ー鍋割峠ー奇沢ー守津茂ー三頭部ー澁沢
資 用 新雪澁沢往復ニ〇〇円、宿泊料百円、茶代ニ〇円、飲料水代一〇円

いわゆる親友同志が集つて形成されたハイキングメンバーのオ四回例会である。日帰りのコースに三日間を費し心ゆくまで自然と親しんだ。三月中旬の馬鹿尾根は雪どころか、ほこりつぽい、その日の反は武蔵ヶ丘高牧田島君のみとは云い難い。小屋の持運には胸を打たれた。長い表尾根平凡な大倉尾根とは異つたハイキングコースであるケルンが毎く奇沢は変化にとんで印象深い。

雲取山

期 日 三月二十七ー二十八日
参加者 鈴木(30)
コースタイム
二十七日 氷川(八〇〇-九二五)ー鴨沢(二二三〇)堂所ー柳坂ー小雲取ー雲取山(五四五)ー小屋(六〇〇)

二十八日 小屋突(六四五)―山頂(七〇七三)―御坂―七石山―七石水
 湯―鴨沢(二〇五)―川野(二三〇)―氷川(二四八)
 装 備 ヤツケ、セーター、米一升

氷川にてバスを一合のがし鴨沢出発が予定より大分おそくなってしまつた。例外的な今年の気候にあつて雪はセツ石辺りより五寸程度にすぎない。(これ以前日の降雪)危ぶまれを念も大した事はなく六時ジャスト小屋に入った。その日の及雪水高夜のパーティと共に寮生林の夜を明す。翌日も自分の身を察しセツ石を経て鴨沢に下り、川野よりバスの人となつた。初の単独行が能率的で快適であつた事を二伸する。

鋸尾根より茅倉尾根

期 日 廿六年三月廿七日 天候 晴

パーティ 加藤、岩崎
 タイム 氷川(七三〇)―銀岩(八〇〇)―天地山(九四〇)―大岳山(三〇)―(二二〇)―入割峠(二四〇)―富士見台(二二〇)―ツツラ岩(トド)―(三二五)―高瀬川山(二五二)―高明山(二五〇)―雷道(三二二)―学校(三二五)―秋川養川の合(二五〇)―五日市駅(三二五)

記 事 愛宕山は氷川の目前で円錐形を成している。我々はこれを登計の側に巻いたのどKは残念があつた。面白そうな山である鋸尾根は立派な径が判然とついている。多摩川沿りの貯水池は何時迄もその姿を没せず山の空気を壊つていた。大岳ののんびり「めし」をくい、後は感深い湯を浴びた尾根を足の進むにまかせて五日市に下る。

川苔山

(13) 期 日 三月二十八日
 パーティ 世田(途中から立川高校の君と合併)

費用 二〇〇円
 装 備 ヤツケ、着換、靴、ワラジ、手袋、細引、縄、磁石等
 コースタイム

氷川橋(八〇)―三谷川山荘(よる)―(八四五)―大沢(九三三)―川苔谷(九五〇)―出合突(二〇〇)―曲尾尾沢(二〇五)―(出合)―山伏沢(二〇)―白ヒロノ滝(二二〇)―(二四五)―(晝食)―大打石岩(二二五)―ウスバ尾根(三二四)―(三四五)―川苔頂上(二二五)―(三三〇)―大根の山の神(三三五)―(三四五)―鳩の巣(四二五)―(四三三)

又氷川へ来た、昨日の雨はすつかりあがつた、よく晴れた日だ。心なしか川の氷の水量が多い。立川高校の二年生と一緒にいる。彼らはこの石は何とか石といひながら時々立ちどまる。私もおつきありに川苔谷に入つてからも道中はせまくなつたがたんと狭く所々橋がおちていゝが危いしたことはなほ。白ひろの滝についた。良い滝だ。冬食をとつて又進む。ウスバ尾根で最後のアルバイト、汗ひつしより頂上についた。今にも逆さ出しそう空ではあつた。どこからともなく鳩の香がにおつて来る。その香にひかれて早々に山頂を許して里に向つた。

鋸尾根

期 日 昭和二十六年四月五日 天候 曇

パーティ ①T、M、M、T
 装 備 ウインドヤツケ、乾パン若干
 コースタイム

氷川山荘(二四五)―登計(二五二)―愛宕神社(五二五)―鋸尾根(三二五)―(六三〇)―天地山(六三三)―大分峠(六四五)―大沢(八二五)―小宿(八七五)―山荘(八〇五)

記 事 大洞山帰途、時間の余裕があつたので井田山へ行くつもりだったが、線路工事のため変更して鋸山へ登つた。三年前とちがつて雪は全然な

かつた。大ツワ峠より見た御前はまほ所々に残雪があった。大沢は過去三年間連続的に経の位置が變つてゐる(日没後は注意)

刈奇山・市道山

期 日 四月八日 曇

参加者 村田博之助 村田敦(兄)

コース 五日市駅―本郷―刈奇山―鳥屋切場―市道山―醍醐峠―和田峠―藤野駅

本郷道が入って歩きにくい刈奇沢をのぼって刈奇山に到達。この辺は昔山火事があったせいで黒こげの木が点在している。山での火の後始末を考えさせられる。刈奇山からは急な防火線を一気に下り石に曲つてやがて鳥屋切場をすぎ凹凸のはげしい峰見通しを越すとやがて市道山に近づく。この辺りから天嶺展望、神奈川県に入ると指導標も整備され道もよくなる。和田峠からは何の変化もない道を藤野へとたどつた。(後記) このコースは奥は相吉ボサが出る程ですが、現状には市道山醍醐峠附近で乗鞍りができます。

川苔山

期 日 四月九日

参加者 田中実

コースタイム 立川(七三三)―氷川(八四〇・九五〇)―川苔谷入口(一〇〇五)―聖竜山伏沢谷―百尋谷―横ヶ谷小巻跡―曲ヶ谷沢比奈―川苔山(一〇五〇)―一斗井戸―峰―大根の山の神―棚沢―鳩の巣(三四〇)

参加者 阿佐ヶ谷、永川往復一六〇円、バス(氷川、川苔谷入口間)二〇円

氷川でバスのために一時間以上遊び、下ってきたカスと不安に地固もろくろく見なかつた事は考える余地あり。林道は桝橋が非常に危険であり、

しかも空中、尾元は枕木雨ケ、ブルで音をつらめる恐れあり、大いなる注意をせよ。横ヶ谷谷沿いは榎松と白樺で美しく、又哀れみ深い山頂の気分塔の岳と似たものあり孤狼の峰部落又築しからずや。

戸倉三山(三山)―陣馬山

期 日 四月九日

参加者 パーティ 長崎、徳田、費用 百五十円

コースタイム 五日市(八〇〇)―金巻(八五〇)―伝名沢(九二五)―石沢(九三〇)―合合(九四五)―尾根(一〇三五)―刈奇山頂(一〇四五)―石沢(一〇五〇)―金巻沢(一一二〇)―鳥屋切(一一三〇)―イッポウ山(一二四〇)―陣馬山頂(一二五〇)―醍醐峠(一二五〇)―和田峠(一二五〇)―陣馬山頂(一二五〇)―傍谷分岐(一二五〇)―明子峠(一二五〇)―手瀬(一二五〇)―(一二五〇)

早足の二人旅だ。天気は上々白い雲が山のかまどにうかんづいて、霧の深まりが頭に照りつける。が、沢に入るとさすがに気持ちよい。ゆつくり歩いてきたのだが、やがて尾根に出て又頭をたなをのりぬる。刈奇につく。人が来たりは一目でわかる。飯くす、食かす。山のようにたがらである。時々飛行機が飛んでゆく。樵夫の木を切る音が聞える。伊豆山はことなくすんで、後に陣馬への道がつづく。のどか春暮、しづかだ。やがて陣馬へついで。遠くのもの、この川が蒼がすみの中にかんづいて、空にカラスが群をなして飛んでいく。(なおお我々は木だ橋をすまじりコースを通つてうしひです。)

鋸大岳御岳縦走

期 日 五月三日

参加者 パーティ 3名 佐藤他二人
コース 立川―氷川―弁天橋―えんてい下―大たの―大岳―御岳―御岳駅―立川

費 用 立川、氷川、六十円、御岳、立川、四十円 計 百円

このコースは大だゆ迄道がわかりにくり。しかし沢に沿って行けばやがて沢を渡っている橋に出る。その道を上へへと行けば大だゆに出る。あとは尾根まのぞ祭しく歩くことができます。秋にはあけび、きのこまどかとれる。

(註) 沢では道が切取ケルンもまい、しかし沢を登れば道に出るから、後ま道にはいらむりこと。しかし右側にはいる道がある。それには山、大だゆに出る。

(何人山行中 一部報告でできませんでした事とお詫び致します。)

部内あれこれ

富士山

毎年本校で行われております山岳部主催定例富士登山は本年より本格的に山岳部が率先して行うつもりです。まあ期日は七月、八月ですが、詳細は追って追進いたします。

新ルート南拓大会無期延期

一月二十一日行われる予定でありました新ルート南拓大会は都合により無期延期となりました。お知らせまで。

退部者

元CL田中将利君は二月一日を以って退部いたしました。

新リーター

二月一日の選挙の結果、SLが四人同票となりましたが、特に二年生を送び左の如く決定。

- CL 三A 中野英司
- SL 三B 加藤鈴夫
- SL 三C 村田博之

入部者

五月十日現在一年生九名、三年生一名が入部、氏名は別らんへ。

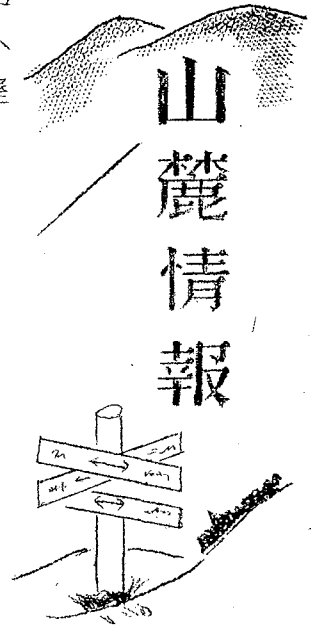
お知らせ

- 会計係は新しく26岩塚玄三
- 山行の記録、報告などは大争に保存し、必要の時即時提出してもらいます。
- 山岳部落書き帳二冊目が出来ました。又ごしくお書きください。
- 各山行の写真入用者は本人迄
- 雑誌を貸り取りものはリーダーに問い合す。
- 中間査定終了後、現役OB懇談会を聞く予定です。

お断り

- 四月廿二日の川苔山葉中登山はカロー谷、赤虎尾根など大コースで新一年生及びOBを参加し盛大に行われまして、報告は追って「川苔山符集」として発行する予定です。その際解散の途立川駅にてCL村田君は語る「予想以上の收穫をあげたことは非常によく申し、立派なリーダーに社し二の山行が大成功であったことを感謝する」
- 何人山行へ森沢、中野、田中)の大洞山登巻報告は都合により次号に掲載します。

山麓情報



○山小屋

将監小屋リ完成まる。便所あり快過。約一五二〇人收容可。無人。
位置は旧武州将監小屋の跡、水は豊富だが燃料は全然乏し。
大森小屋リ泉水谷出合や、上流右岸、薪水あり。小坂程隻熊人約三十人可

会所小屋リ由辺義一氏によると削壊と報告されていた会所小屋は立派に宿泊可能であるとの事であり、一網からの踏跡もかなりはつきりしている。

笠取小屋リ積雪期釘づけ状態で、笠取小屋も四月十日が二十日頃より田辺氏が入るとの事

大沢小屋リ大沢小屋は新しいが最早サイド大坂
三頭小屋リ完全に分解、土台のみ

○林道その他

白石山、徳松尾山の泉生林にも、今年(又は去年)一ノ瀬の部落民がナタメを入肌なおすとの事

一昨年キマスリノ台尻で荒肌はてた泉水谷林道及大菩薩比面を通つて柳沢峠へ抜ける踏跡もいつのまにか新しく修理さ出来ている。

笠取から柳沢峠への尾根径も今ボサガリをしてゐるため變でも歩きよくなるだろう。

ミッドツケ下より横尾尾根へ入りすぐ左に下り倉沢谷壺地谷に沿つて

倉沢鍾乳洞前の釣橋へ出る径は踏跡ナタメ共にさだかではまりが充分秩父の気分が出せる所だ。

奥釣氏によると長天有陵(アラスカ)はボサヒどく残雪のある四月下旬(五)のうちに六月の石楠花は美しうてある。

△日原小川谷石岸に巾一間位の林道が鳥居谷出合這入った為大麓附近の道力は甚肌だが、カロー谷及黒ドツケへは容易になった。

△日原タワ尾根は全然踏跡もなし。

△トマド尾根はとつききはつきりしてゐるが望の岩山附近下部は不明、後線は積雪期でも相当ぬまさ小坂から製期は以上の忍耐が必要である。

△日向谷頭附近から有岡山及び有岡谷への径はボサガリのすこい。

△大ツ石山、山、掃尾根もボサガリといふと云われぬ。

△海沢城山から鍋割山へ続く後線上の踏跡は快過に歩けるとのこと。

△丹波から船越橋通り乗に左岸に一昨年からエキ中のパスの通れる道は二日完成してゐる。丹波川の踏カも半減して行く程寒気がする。

△又カサス尾根は南よりとりつくりもむる河野からハシ天を廻行していきなり又カサス峯にとりつくり方が早いし、バラエティにとんでゐる。

後線は積雪は左程でもないが一步後線をはすすとモガキ通さぬばきらなす。ブナの泉生林は美るべき箇所は充分にあるが小屋跡より西登への後線はボサ甚しく製期は困難であろう。又鷲峠への巻道及常の立坂は割水がおびたせし。

△大ダツ峠から大沢と下り小沼浦への径は毎年ガレのたの位置が異なるためここにコースをとる人は夜にすらぬ様注意してほしい。

△二、三年前ではあるが、日原割谷の頭(坊主山)から一ツ石崎の間の林道は大部くさつてゐた。ボサもひどい。

△カロー谷・旭上谷はコリ谷や画谷の様なブツツはきり。

○名郷河又バス時刻表

又流 7.00 8.00 9.30 11.00 12.30 14.00 15.30 16.30 17.30 18.30
川 7.00 8.00 9.30 11.00 12.30 14.00 15.30 16.30 17.30 18.30
●昨年まで笠取小屋にいて愛きよを稼いましていた黒い小犬は昨年十一月秋雁坂峠附近(又は坂底)に行方不明となつた。深く哀悼の意を表する次第である。

部員名簿

續向		岸田文男先生		立川市紫崎町	
以三	A中野	英司	世田谷区代田二ノ六八二		
SL	Q村田	陣之	杉並区和泉町一五八		
	二B加藤	鈴木	永福町四七		
	部員三A鈴木	輝夫	世田谷区比沢二一九二		
	B世田	英次	中野区仲町一三		
	B佐藤	信治	入王子市本御町二。		
	B鴻池	泰夫	杉並区		
	B桑田泉	一郎	神明町一		
	B平沢	一郎	上萩窪一ノ四一		
	C龜田	佐	武蔵野市吉祥寺三二四五		
	D田中	実	杉並区鶴橋二ノ一五〇		
	E平沢	勇	武蔵野市吉祥寺一九〇		
	F山口	雄弘	杉並区井荻二ノ一五二		
	Q竹内	章	中通町五		
	Q名倉	横	世田谷区祖師谷一五六二		
	Q森沢	拓治	杉並区高橋四ノ五一		
	Q長崎	正躬	中野区本町通五ノ一一		
	川列合	秀明	世田谷区三軒廻三三四〇		
	二F野口	弘生	杉並区鶴橋二ノ一九〇		
	F合井	言	下高井戸二二〇二		
	Q岩城	安三	高内寺六七〇六		
	A下出	重遠	井荻一ノ一三二		
	A戸田	清	高内寺七一九二九		
	A福田宏	三郎	又我山三ノ九九七		
	A中山	義郎	三橋市牛乳一八七		
	D関谷	徹	杉並区下高井戸四ノ九六三		
	E斎藤	忠正	大宮前五ノ八〇		
	E佐藤	忠彦	武蔵野市吉祥寺一九八		
	F川村	宏	二八三五		
	F林	武志	四七八		

しめくくり

●吹きまくる風にはんばつた足も涙とより屋根を下り林道を走つて帰って来た我々は久しぶりにその跡を反とりつゝ遙に本号の完成をみる。福康員一同長びに堪えなむ。

●本号即ち「彷徨」は一九五一年十一月以降の記録によつて内容を計り更に本号は福康員の意向によつて新入生及び部員外の奇稿を中心に以て完成発行した。

●度々の事下らお忙しし中を御投稿下さつた部員諸君並に卒業生諸君に対し深く感謝し又部外者下らひそかに大自然を交とする田中将利君、山田和子さんに対し深く感謝の念を抱く次第であります。

●「彷徨」発行以来先生の校稿に機会がまかつた過去、本号において自然熱愛者(山岳愛好者)板沢龍男先生及び中井鈴先生の奇稿を得ました事に對し深く御礼申上ります。

●本号は三名の部員を除いた殆んどの有より投稿していただいたものであつて、その報告に於ては他人の批判を受けざる場合があると思つた彼等は単に山を歩く事のみ即ち山歩としての文学的才能を發揮したにすぎず事を知つておられ、新入生諸君のおのどろ。君達は單なる宣伝にすぎず入部したのでは無く本心から山を受する気持ちがあった。在学中の西高山岳部と皆様の「続く君に」に「フアイト」燃ゆる「バトン」を渡していただいた。きり。

●高尾山から奥多摩へ、奥多摩から丹沢へ、丹沢から雲取山へ、雲取山から奥秩父へと森らは渡つてゆく。我々は自分の歩みの高々と知つておられるのだろうか。

●霞山が冬山に履取歩きが沢上りに我々は若しし進歩をみた。この機会に技術の進歩を計りたり。

●感情対立と云ふものごり、ターゲが獲つた時代もあつた。中野村田加藤君、西高山岳部は君等が皆勤であるとも云ふのであろう。

●昨年奥目黒計道に於て遭難し九死に一生を得た今井君が、一週間以上の意識不明半死以上の入院生活から再び元氣ま望を本校に見せた。私は胸がはげりさける思いで彼の報告書(当時の印象)をよみ終つた。しほらく彌かよらなかつた。今井君の未來の生活に對し心から幸福を祈るものである。諸君山には又明社会以上の相手がある事を志願する。

●小さな計画に大きき希望をいだけ。そして大きな計画に達した時は小さな希望の山に登ろう。うやまひか。

●今年に相当の山に送り込んだ。しかし季節的に寒まわつて来た未冬山は我々の出方を今からうかがつておられるのであろう。

●本校山岳部員にタッチフットボール、水泳サッカ、卓球各々の主将(キョウマツチ)がいる。山岳部は運動部の精神修養機関でもあろうか。いや、彼らに山登りにこそ欠くべからざるものなのであろう。

●留守がちな三年生に渡つて二年生よ、フアイトをこぞ未履き三年生はこぞフアイト、フアイトを穿いだまらば、自分の存在とあやうゆよ。

●渡れる世界の動き我々は懐かまじ山を及こし山の生活を過し反りのであるが、いやいづくともなるかは考えなくもなりのものである。

●最後に田中君の研究心(山麓情報)に敬服し、板沢先生の言葉を思い出し今君等の幸福を祈りつゝ、今こそ諸氏の校稿に對し改めて感謝しなむ。

●とかく批判を受け易い部報内容にあつて特に本号は部外者を中心とした発行態度的な御教とを下さりました事に深く御了解をいたし、次号発行に際しての御批判をぞつ。

彷徨 第六号

昭和廿六年五月十一日印刷

昭和廿六年五月十七日発行

福康員 中山義郎 斎藤忠正

発行所 福田三郎

責任者 田中

發行所 藤田西高専学校山岳部

東京市杉並区本町三二二

電話 板屋三二八八